

## □三宅島噴火災害からの復興と教訓

(社)減災・復興支援機構専務理事

(ネットワーク三宅島 代表) 宮 下 加 奈

## はじめに

2000年の三宅島噴火災害から10年、全島避難解除からも5年が経過しました。

三宅島は、多くの皆さまがご存じのとおり、実に短い周期で噴火を繰り返してきました。昭和に入ってからでも4度の噴火を起こし、島民の生活に大きな被害をもたらしてきました。

この2000年の災害では、5年4ヶ月にわたっての島外避難、コミュニティの崩壊と再構築、避難解除後の復興など、多くの課題と教訓を残したと言えます。

特に、長期に及ぶ生業地を離れた避難生活は、被災者の生活再建はもちろん、被災地の復興にも大きな影を落としてきました。それは、災害や避難が長期化するとされる火山災害だけではなく、近年発生している地震災害にも共通するのでは、と言われています。

この10年、前例のない長期全島避難を体験した一被災者として、あわせて日本各地で発生した災害被災地を訪ねることで感じた、三宅島の課題と教訓を振り返ってみます。

## 災害発生から全島避難まで

三宅島と同様に、比較的短い周期で噴火し、住民の生活に大きな被害を与える火山として、有珠山が挙げられます。奇しくも同年3月に有珠山は噴火しておりますが、これまでの観測データや、前兆現象などから事前に災害を予測し、事前避難を成功させた非常に珍しい例だと報告されています。

一方、今までの三宅島噴火では、住民が身をもって感じるような前兆現象というのがほとんどないというのが特徴です。

2000年6月26日19時33分。突然の緊急火山情報により噴火の発生を知らされました。夜の団らん時間、一瞬にして17年前(1983年)の噴火が蘇ってきました。1983年の噴火では、大量に流れ出した溶岩流に生家は完全に埋没し、通っていた鉄筋コンクリートの学校さえも、溶岩流により被害を受けました。全てを失ってしまったという絶望感が押し寄せ、あの災害が再現されるのかと思うと不安でいっぱいになったのを覚えています。

幸いにも、この時の噴火は、島内に大きな被害を出すこともなく、僅か4日ほどで一



**83年の噴火遺構**  
(遊歩道ができ溶岩の上を歩ける)  
(写真撮影：災害福祉広域支援ネットワーク  
サンダーバード理事 蓮本浩介氏)



**2000年泥流に埋まった椎取神社**  
(写真撮影：災害福祉広域支援ネットワーク  
サンダーバード理事 蓮本浩介氏)

応の終息を迎えたかのように思えました。

ところが私たちの雄山は、17年ぶりの活動を終えたわけはありませんでした。7月に入っても規模の大小を問わず噴火を繰り返し、度々、多量の降灰が集落を襲い人々の生活に大きな被害を出しました。大量につもった火山灰は雨のたびに泥流となって襲ってくる危険があり、噴火だけではなく雨が降っただけでも避難所に行かなければならず、数日おきに避難するのは当たり前のような状況が続いていました。

8月18日の最大規模の噴火では、噴煙は成層圏にまで達し、同29日には火砕流が発生したと言われました。この火砕流発生と降雨に伴う泥流被害を避けるため、全島民の島外避難が決定し、誰も予測していなかった4年5ヶ月という長期避難生活が始まりました。

島民が島外避難を完了した2000年9月以降になってからは、三宅島の噴火史でも、世界の火山観測史上でもきわめて珍しい、長

期にわたる火山ガスの放出が続き、さらに島民の帰島を遠いものとしてきました。

### 生活の不安と三宅島への思い

まず、島外避難に際して一番に思ったこと。率直に言うならば「不安」この一言だったと思います。

2000年の災害では、全島民が島を離れての生活を余儀なくされました。避難した順に割り当てられた住宅。既存のコミュニティーは崩壊したも同然です。

1995年の阪神淡路大震災の教訓から、避難所や仮設住宅への入居時は既存のコミュニティーを考慮することが重要だと言われてきましたが、この時には活かされませんでした。

慣れ親しんだ土地を離れての避難生活は、孤独感が募ります。狭い島とは言いながら三宅島には大きく分けて5つの地区があり、

地域間の交流は活発であったとは言い難いことも事実です。親戚や友人を通じての交流はいくらかあったとは思われますが、3,800 人もの人が住んでいれば当然知らない人も多数います。特に高齢で、移動の手段をもたない人たち、その必要があまりなかった時代を生きてきた人たちにとっては重大事件です。それが、都会という住み慣れない、全く見ず知らずの場所で、一緒に暮らすことになりました。島内でも、地区が違えば生活習慣・文化・ものの考え方等の違いもあり、最初はずいぶんと戸惑いました。

しかしながら避難生活が続いてくれば「島外避難している」という急激な日々の変化に伴い、心細さや精神的不安定から、避難地域ごとに島民が集まる場などを工夫して生み出していくことになりました。新たなコミュニティの構築です。

あるボランティア団体はコミュニティごとに FAX を配布し、島民のための情報紙を発行し送信することで、コミュニティの連携、見知らぬもの同士の交流を手助けしてくれました。

自発的に集まった島民のグループでは、いわゆるサークル活動のようなものを展開する、重要な書類の記入をお手伝いする、選挙にみんなで行くなどいくつかのきっかけを元に、人と人との繋がりを作っていました。

そうなるに次に心配になることは、やはりいつ帰れるのかということになります。

避難者の私たちに入ってくる情報は決して明るいものではありませんでした。もちろん、自然が相手ですので、先の見通しが立たないのは当たり前と理解はしていました。

ですが、先(帰島時期)がわからないということほど不安なことはありません。

帰島できなければ、島内の事業主は再開の見込みが立てられません。その一方、帰島できなくても、日々、生活はしなければなりません。

2000年9月の時点では、避難が長期化するなどとは思っていませんでしたので、預貯金を取り崩して生活をしていましたが、避難が長期化すればそうもいかなくなります。避難して比較的早い時期に適用を受けた被災者生活再建支援法についても、当時の基準では世帯主の年齢や収入制限といった縛りが厳しく、ローンを抱え、子育てをしているといった、もっとも経済的支援を必要としている世代への適用がかなわなかったのは残念でした。

そんな中で、生活への不安を少しでも軽くするために、避難中に島外での生業を求めてしまった人も少なからずいました。当初はアルバイト的に就業するつもりでしたが、災害が長期化し、先の見えない生活を支え続けるのは非常に困難です。あわせて、就業先からも先の見えない社員を抱える不安が出始め、正式に就職するか、否かという大きな問題となりました。

また、島で暮らす大多数の高齢者(年金生活者)は、家庭内で消費する野菜程度は自分たちで作る自給自足に近い生活を送っていたこともあり、こちらも生活は困窮をきわめました。慣れない生活で持病が悪化して医療費がかさむ、帰島してからの家の補修費を残しておかなければならないなど、生活を切り詰めなければならぬ状態が精神的にも肉体的にも非常に大きかったと思

ます。

私たち島民には、慣れない土地での生活、新しいコミュニティーの形成と既存のコミュニティーの維持。そして復興への体力、気力、財力の維持。問題・課題は山ほどあります。

そんな中、私たちの気持ちを支えていたものはなんだったのでしょうか？

自然との共生を受入れ、住み慣れた土地へ帰りたい。そんな思いでしょうか。

これは三宅島島民だけではなく、日本各地で起こった自然災害の被災者すべてに共通する思いだと思います。

では、そんな思いをかなえるために必要なことは何でしょうか。

## 復興への課題

被災地の復興とは何でしょうか。

私はこれまでも「復興とは」と問われたら、「日々の生活が普通にできること」と答えました。

普通にできるようにするにはたくさんの努力と支援が必要なのだと思います。

今回の三宅島噴火災害は被災者生活再建支援法の改正(2007年)前で、その支援金を住宅再建に充てることはできませんでした。では、住宅が再建できただけで復興を支援することができるのでしょうか。

前述しましたとおり、被災者がその地に戻り生業を再開できなければ日々の生活は戻ってきません。新しく復興を担ってくれる人たちを迎えるためにも産業の再生が不可欠だと思います。この産業がどこまで復

興するかが、人々の生活を支えていくのだと思います。避難が長期化したがために、生業の再開をあきらめざるを得ない人たちも多く、結果、産業再生の遅れ、復興の遅れを招きます。

被災地の復興は、被災者一人一人の努力と、地域の産業再生にかかっているのだと思われま

す。今回の災害で大きな課題となった、長期避難に関する支援のあり方と、地域の産業再生について、もう一度検証する必要があるのではないのでしょうか。

## 現在の三宅島

三宅島の災害から10年。帰島からも5年経ったことを冒頭でご報告させていただきました。三宅村も島民も、帰島後、様々な取組みを行なってきました。

三宅島の災害はもう終わったと思いませんか。実は三宅島の噴火災害はまだ終わってはいません。今現在も雄山からの火山ガスの放出は続いています。そして、島内には高濃度地区と呼ばれ、居住が禁止され



現在でも居住禁止（三池地区）

(写真撮影：宮下加奈)

ている地域があります。災害から10年、帰島から5年経った今でも自宅を目の前にしながら家に帰ることができない人たちがいるという事実が残されたままなのです。

避難中には自然の豊かさ、歴史、伝統など、三宅島そのものの素晴らしさをあらためて感じることも出来ました。天気が良いのも、雨が降るのも、災害が起きるのも全てが自然です。そして、温泉が湧き、風光明媚な景観をもたらしてくれるのも、この地球が活発に生きている証拠です。三宅島島民は、その自然を受入、共生していく道を選んだのです。

災害から10年。一つの節目だと思われるでしょう。しかし、被災した当事者からすれば単なる通過点にすぎないのです。15年経っても20年経っても100年経っても変わりません。変わらぬ郷土「三宅島」なのです。

20年周期で言えば次の噴火まであと10年。復興過程の我が島は、もう次の噴火への準備と、復興への目標を考え始めなければいけないのかも知れません。三宅島、被災地にとっては「生きること」そのものが復興なのかも知れません。

機会があれば、是非三宅島にお越しください。